

「米国伝道会宣教師文書」に関する様々な報告(二)

— 来日宣教師の夫人たちの手紙 —

その(一) W・W・カーティス師の夫人たち

若 山 晴 子

宣教師夫人の手紙 米国伝道会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions - A.B.C.F.M.) の宣教師文書^①を通覧すると、男子宣教師の一般的呼称としてしばしば gentleman なる語があてられている。これに対応する語は lady であるが、これは概ね独身婦人宣教師を指すものの如くである。そして男子宣教師の夫人の場合は Mrs. (ミセス・基)と書かれ、なおこの人々が lady と共に在る場合には、ladies と総称されている。

米国伝道会の日本派遣男子宣教師は、殆んど、夫人同伴で来日した。着任当時独身であったのは、H・H・レヴィット師^②、新島襄師^③を含め、数えるほどしかない。そして夫妻同道でやって来た人々の場合、現場の活動において表立って名を連ねるのはまず夫君の方であり、ポストンにある伝道会本部宛ての報告書簡を恒常的に認める^{しんめ}のも、また同様であった。これら本部宛ての報告書簡の数は、婦人宣教師の場合、概して多くないが、書き手が宣教師夫人の場合にはまた殊更に少なく、時には皆無ということもある。但し、書簡を認めなかったからと言って、それは、報告に価

する仕事をしなかったかどうかとは別の問題で、伝道活動の実践もその貢献度も、これによって計ることはできない。ボストン本部宛てに自ら筆をとらなかつた理由の大きなものとしては、夫君の報告で充分と考えている場合のほかに、米国伝道会の協力団体として婦人宣教師の世話を引き受けている婦人伝道会^① (Woman's Board) との関係を大切にして、こちらの方との連絡に重きを置いているという場合も考えられる。(この後^との方の理由は、独身婦人宣教師の場合も有効である。)

さて、これら、宣教師夫人からボストン本部に送られた手紙は、数量的には小さなものであるが、その内容には非常に大きな意味を持つものが少なくない。殊に、その、「宣教師夫人」という立場が、独身婦人宣教師とニュアンスを異にする一、二のことに注目しよう。

それはまず、一人の男子宣教師の言動を最も近い所で受けとめ、絶えず意識し、公私の別なく共通の目標のもとで影響を与えあつて働く生活を余儀なくされているということである。このような状況から送り出されるコメントは、善きにつけ悪しきにつけ、外部の人間には測り難い伝道活動の内的側面を窺わせてくれることになるかもしれない。

また、宣教師たちは各々、自らの明快な決断によって、家を離れ親兄弟と別れて来たもので、このことは独身婦人宣教師の場合も何ら異論はない。しかし、宣教師夫人の場合は、必ずしもそうとばかりは言えないように見える。勿論、結婚を考えるより以前から宣教活動に心を傾けていたが、幸いにも理想的な夫に恵まれた—という人もあれば、婚約者の意気を感じてはじめて、手を携えて任地で働くとうと心を決めた人もあろう。しかし時には、たまたま夫たるべき人が宣教師を志願したので、自分は彼の妻としてついて来たにすぎない—と言う人もあつたらしい。J・H・ペティ夫人イサベラ^②もそうした人の一人であつたと聞く。もっともこの人は、伝道の現場で暮すうち、日ならずして立派な宣教師夫人に変わつてしまつたと伝えられる。このように、その程度に差こそあれ、出国の決断の契機あるいは

動機に、結婚という事柄の故に多少とも受動的な要素を加味することを余儀なくされた人々であれば、そのコメントを通して、他の全く自発的な決断をした人々とは一味ちがう、含蓄に富んだ声が聞けるかもしれないという期待もある。そこでこのたびは、数ある宣教師文書の中から来日宣教師の夫人たちの手紙をとり上げ、何回かに分けて、若干のことを報告してみたいと思う。とり上げる人と順序は担当者が恣意的に決定することになるが、本誌の性格上、なるべく神戸女学院と関わりのあるところから選んでゆくつもりである。

W・W・カーティス師の夫人たち 本稿では、日本で最初の五線楽譜のついた讚美歌集を編集したW・W・カーティス師^⑦の夫人たちの書簡を紹介する。カーティス師は大阪と東北・北海道の伝道に盡くした人で、神戸女学院との直接的関わりは薄い^⑧が、その代表的な業績である讚美歌集は本学院図書館所蔵の「オルチン文庫」^⑨の中でも異彩を放っている上に、はじめの妻デリア夫人^⑩の書簡には、初期の神戸女学院の問題が大きくとり扱われているからである。

世間的な言いまわしによれば、W・W・カーティス師は夫人運に恵まれなかった—ということになるかもしれない。海外伝道を決意し若々しい意気に燃えて祖国をあとにした時、師と行を共にしたのは一—歳年下の新妻であったが、この人は来日後三年にして夭折し、なお、その五年後、師の静養帰米中にめぐりあった再婚相手は終始病弱で、この点では師の気持は殆んど休まる暇なく、結局はそのために帰米と引退とを余儀なくされているからである。しかしながらこれらの現象がカーティス師の生涯と事績に対してどのような意味を持ったのか、性急な判断を下すことはすまない。師が、日本の讚美歌史上に画期的な、全曲に五線楽譜のついた讚美歌集を編集刊行したのは、先の妻デリア夫人病歿の直後のことであり、また、新設の仙台伝道区を足場に北海道伝道区開設のための執拗かつ精力的活動を展開したのは、後の病妻リディア夫人と四人の子供たち^⑪を擁する家庭生活を営んでいた時期のことであった。これらの事情

は師にとって「にもかかわらず」であったのか「であるからこそ」であったのか、大いに興味をそそられるところではあるが…。

デリア夫人のこと W・W・カーティス師の生涯については、先年、先述の五線譜附讃美歌集『讃美歌并樂譜』を覆刻し解説をつけて公刊した折りに、かなりの頁を割いていただいて、述べた。^⑧それ故本稿では紙数の都合もあり、これについて殊更に述べることは割愛したい。

シカゴ神学院を卒業後、カルメットの教会を建ててその牧師をつとめ、次いでハンコック教会の牧会に招かれていたカーティス師が海外伝道を決意したのは、一八七七年、三二歳の時であった。師はその年八月三十一日に一歳年下のデリア・E・ハリス嬢と結婚し、同年十一月三日、夫妻は相携えて日本に向かう。のちの神戸女学院の第二代校長となるV・A・クラークソン女史と道連れの旅で、爾来、夫妻はクラークソン女史に関わる諸事の注釈者の役を負うたかに見える。殊にデリア夫人の余生三年の間に認められたたつた二通の手紙の一通は全くクラークソン女史のための釈明に盡き、夫人は持ち前のたおやかな口調で、打ちとけた友人に恵まれなかった女史の立場を伝えている。

デリア夫人は一八五六年十月二十四日、ウィスコンシンのレオンの生まれ。^⑨エヴァンズヴィルとオベリンに学び、暫時教職についたのち、カーティス師と結婚して日本にやって来た。来日当初の事情は夫人のもう一通の手紙に事細かにつづられており、読みごたえがあって楽しい。但し、来日を決意した動機など、在米中のことについての言及はなく、夫人の生いたちを知る手がかりの得られないことは、残念というほかはない。

夫人は音楽の才に恵まれており、赴任の際には当時の日本では全く珍しかったピアノを持参し、これを伝道活動の手だてとして大いに活用した。また、キリスト教関係の催しに貢献したのみならず、大阪の英語学校などで演奏会

を開いたり、歌の個人指導にあたったりもした。『天上の友』に掲げられた一葉の写真によればその風貌は見るからに美しくやさし気で、実際、歌が上手でよく歌っており、人と会っては常に快活で親切であった——という人物評は（追悼文のきまり文句や夫の身びいきと解したい向きもあるうかと思いつつも）、遺された二通の手紙の口調と思いあわせると、納得できないことではない。そして更に、この快活な美わしさが天性の美の単純な横溢ではなかったことを、夫君の証言^⑩によって知る時、夫人を見る目はまた自ずから定まるであらう。

日本に在った三年の間、デリア夫人は健康に恵まれていなかった。それが三年後の死に直結するものであったのかどうか、あるいは在米中にすでにそういう傾向があったのかどうか^⑪、その命取りになった病名も確定し得ていないことと共に遺憾であるが、筆者にはわからない。しかし大阪の夏の暑気と湿気とが、寒冷の地に生い立ったカーティス師夫妻をかなり悩ませたことは事実である。そしてデリア夫人は来日当初より「神経痛 *neuralgia* でひどく悩んでいた」という。

カーティス師は追懐して記す。

「私は時に、彼女の健康のために帰米すべきか否かと大いに疑いました。しかし彼女は至って楽観的で、自分の必要が重大なものであると認めることをいやがっておりました。もっとも、生活は勿論充実していましたが、精神面では彼女は時に大いに打ちのめされていることがありました。神が彼女から遠く離れて、彼女を救わず、彼女〔の声〕を聴き給わざるかのように感じていたのです。」

カーティス師はこれを、体の具合が悪いせいであると言って慰め励ましたと述べ、「彼女の最も親しい友人方の一として、彼女がこのような気落ちを感じていることを知りませんでした。彼女は婦人たちの中でも最も陽気で、快活で、他者との共感に富んだ心の持主の一人として知られておりました」と続けている。

とは言え、死は、かなり間近まで予見されていなかった。医師たちが匙を投げたことをカーティス師に告げてから、猶予は二週間に満たなかったらしい。

「たった一週間。けれどもそれは幸せな週でした。天の国がいとも近づき、救い主が確かに私共と共に在した、祝福された時でした。死の恐れは、その臨在を受容したくないということではないにせよ、私共に在りましたが、静穏と安らかな歓びが〔在りました〕。…」

「彼女はこの伝道団から逝った最初の一人です。当地に在って三年になりません。とは言え―彼^かの地に在って、彼女はもっと幸せで、もっと具合がよくて、多分もっと役に立つことでしょう。それでその事の故に私は、彼女のいい生活は本当に寂しいことでしょうが、喜ぶことができます。」

公生活の短期であった夫人のために、公的記録はあまり紙数を割いていない。手近かなものとして、『天上の友』と『ミッシュナリー・ヘラルド』に掲載された追悼文を挙げておこう。但し夫君 W・W・カーティス師の書簡の中には、本稿に多く引用した夫人長逝直後の伴^りり以外にも夫人の事に言及した箇所は少なくなく、公私両面における夫妻の親密さが窺い知れる。

リディア夫人のこと 一方リディア夫人の生涯については、公刊されたものは尙少なく、さしあたっては『天上の友』第二篇^⑩を挙げるのみ。(しかも、後述するとおり、この記述の最後の一行は全く信用しがたい。)これは夫人の長逝が、夫妻の伝道会引退後のことで、しかもその時には夫君にして名文家のカーティス師もすでに亡く、世に伝えられる機会に恵まれなかったということであろう。また現役時代のリディア夫人は全く健康に恵まれず、家庭のきりもりさえまなならぬことも多く、自宅において語学の教授に多少の時間をさいたほかには、対外活動など思いもよらなかったから、

本人から報告書簡を認める要も殆んどなかったと思われる。かろうじて伝道会本部のファイルに残ったのは一通の短信のみ^④。そしてその晩年はまたおよそ信頼できる史料を欠いている。W・W・カーティス師のことは時折、先輩宣教師の消息として『ミッション・ニューズ』^⑤に紹介されたことがあり、やがては夫妻の長女E・カーティス女史が米国伝道会の独身婦人宣教師として来日していることから、間接的情報でも……と期待したが、前掲書一九二五年秋号（三五頁）により、この頃の夫人が子息ハワードと共にニュージャージーに在ると知ったほかは、叶えられなかった。ただ、カーティス師最晩年の消息は、師が在地の伝道活動に盡瘁するあまり家庭に席の暖まる暇のないことを伝えており、また結果的には夫人がカーティス師を見送ることになったことにより、夫人の健康状態は少なくとも日本に在った頃よりは悪くなかったのではないかと憶測をめぐらしている。

『天上の友』には、リディア V・コーン嬢は一八五三年五月二十日、オハイオ州マディソンの生まれで、オペリン大学を卒業したとある。W・W・カーティス師との出会いは、カーティス師の報告書簡によって推断すれば、一八八四年の内で場所はクリフトン・スプリングス。結婚は一八八五年二月二十六日のことであった。この、出会いがクリフトン・スプリングスという療養所であって、しかも一八八五年のカーティス師の手紙がリディア夫人の健康問題にかなりの紙数を割いているということは、すでに結婚前のリディア嬢が体をこわしていた病人か、もしくは病気があがりであったことを示唆している。「非常に丈夫に、また美しく見えた」デリア夫人を三年足らずで倒し、やがて自らもまた休養を余儀なくされたあの日本に、かかる伴侶と共に帰任しようとするカーティス師の動機はいかなるものか。またリディア夫人の自発性と覚悟とはどれほどのものであったのか。

カーティス師は「伝道」の使命感に燃えている。カーティス師は伴侶となる人を真剣に愛している。カーティス師は任地の気候風土のこともかなり考慮している。しかし、夫人の丈夫さと気候の厳しさとのバランスについての認識

は甘いと言わざるを得ない。そして、リディア夫人に日本の実情はわかつてはいまい。当然のことながら伝道会本部は夫妻の日本派遣に難色を示し、この難色は的を射ていた。

カーティス師はたつて望んで、病妻と生後七か月の長女を伴い、一八八六年十一月、日本に帰任した。師が、大阪よりも寒冷で健康上も適していると考えて選んだ任地は仙台であった。仙台の「寒冷さ」はカーティス師の予測を上まわっていた筈で、師自身は開校したばかりの東華學校^㉔の仕事に我を忘れていたとしても、リディア夫人はそうはゆかなかった。師帰任後の第一信（一八八七年三月五日附）は、夫人が子連れの旅の疲れに悩んだこと、日本家屋は夫人にとって試練であることを告白している。その夏、夫人は神経症状状態で横浜に転地。十二月まで療養して回復したという。もっともこれは翌年二月十二日の長男誕生^㉕と関連したことであったかもしれない。そして翌年四月にはまた、夫人をベルツ博士^㉖に診てもらうために上京したとの便りがある。しかし一八九一年、伝道会本部から「カーティス夫人は日本で生活して不幸せなのではないか」との問い合わせを受けて、師は敢然、次のように答えた（五月十四日附）。

「彼女は不幸せではありません。また、健康を取り戻しつつありますから、まさかになんかそうだということもありません。現在私は、彼女がかつて見たこともないほど良好な健康に恵まれていると申し上げられることを喜んでおります。私共の子供たちは三人共元気で達者です。大阪で生まれた赤ん坊のルース^㉗はすばらしい女の子で、赤ん坊たちの中でも最も良い子です。また最も小さい者の一人ではなく、〔生後〕六か月で二三・五ポンドあります。」

奇しくも（と、あえて言おう）この頃から暫くは、リディア夫人にとって最も安定した時期であったと見える。カーティス師が、東華學校の開校や北海道伝道開拓のために粉骨砕身し、頭痛と難聴に悩まされている一方で、夫人は、一八九三年十月九日、師のために二男をもうけた。機を逸することなく師は認めた（十月十三日附）。

「私どもはもう一人、息子を授かりました。この九日に生まれたものです。母はすばらしく健在です。いまだかつ

てこれほど好調であったことはありません。これは幸先よいしるしであります。それ故私は二重に喜んでおります。」

現存するリディア夫人唯一の書簡は、これに先立つこと三か月の、七月五日附である。恐らく伝道団の年次総会出席のために出かけたカーティス師の依頼で、クラーク博士に手紙か原稿を送ったのであらう。^⑧ほんの一頁ばかりの短信であるが、この夏のカーティス家の様子を巧みに語っていて興味深い。

カーティス師は北海道に伝道区^{ステーション}を開設しようと努力していた。北海道は働き人を待っている。仙台から時折訪ねて行くだけで済むことではない。……しかし、家族を連れて札幌に住みつく目途が立つまでには、三年に余る歳月が必要であった。一八九五年、ようやく、米国伝道会本部の年次報告 *Annual Report of the A. B. C. F. M.* (以下ARと略す) の Stations の項に、“Sapporo - Rev. & Mrs. W. W. Curtis” なる記載が見える。とは言え、この凱旋は一年に満たなかった。一八九六年春、カーティス家の人々は北辺の厳しい冬を何とか乗り切ったかに見えたが、五月早々にリディア夫人の不調が露呈した。リニューマチの再発という。しかも、これが治りかけた頃に動悸と神経衰弱の症候が見え、またその治りかけにインフルエンザに伴う心臓発作が起こって、七月には重病となり、婦人宣教師で医学博士の M・A・ホルブルック女史^⑨に介添を頼んでの帰米という事態に立ち至ったものである。カーティス師は札幌の「私どもの小さな教会」に心を残しつつ、十一月の初めに横浜を発ち、夫人の容態に心を配って、リットン・スプリングスの療養所に入った。

翌年、リディア夫人は回復の徴を見せるが、なおかなり情緒不安定な様子で、カーティス師は、つききりで夫人の世話をし、夫人に合う療養地を求めて移転し、定職なく、伝道会からの経済的援助に頼る苦しい生活を忍ばねばならなかった。一八九八年秋、師は、快方に向かつてはいるが消化器系が弱くてすぐに倒れる夫人をパシフィック・グレイヴの療養所に残し、子供たちを連れてオベリンに赴く。今ほとん角仕事と勉強がしたかった。しかも尚、日本の現

場への復帰の願いは師の念頭を去らず、一八九九年には単身帰任の準備にかかっている。リディア夫人にかなり力がついて、その年七月、夫人が幼少時をすごしたペインスウィルの農場に一家をあげて移転することができ、夫人はこの頃から師の日本帰任を是認する発言をするようになった(W・W・カーティス書簡同年八月二十三日附)ことに據る。米国出発の日は十二月二十日と決まった。

しかし、状況は結局、師の立出を許さなかった。今度はまず、カーティス師自身が座骨神経痛のため暮から療養所生活を余儀なくされ、ようやく翌年の二月半ばに帰宅して、秋には家族を日本に迎えるとして自分は五月に出かけようと言いつ出した矢先、またまたリディア夫人の体調に異変が生じた。このたびはその病名を「この一年の間に大きくなった子宮筋腫」と明記している(W・W・カーティス書簡一九〇〇年三月二十八日附)が、四月二十日の手術の具合が良くなかったので一か月後にやり直しの必要が生じ、夫人はこのため精神的にもひどく参ってしまったのであった。米国伝道会はカーティス一家の日本渡航断念を勧告し、さすがのカーティス師もひとまずこれを諒承するしかなかった。一九〇〇年六月二十一日のことである。

とは言うものの、カーティス師の日本帰任の志はなお已み難く、翌年四月十三日、再度伝道会に書を送り、事情が好転したので、妻子は冬の間は当地に置くとして、自分は秋にでも出かけられる旨を提言している。しかしながら、米国伝道会はもはや、リディア夫人の健康に信を置かなかった。カーティス師の熱弁も何通かの診断書も効を奏さず、一年余の交渉ののち、一九〇二年七月九日附の書簡をもって、カーティス師はようやく日本帰任を断念する。

その後のカーティス師一家はオベリンに住み、師は令兄の監督する Industrial Missionary Association の活動に身を捧げた。やがて夫妻の長女イデリス、カーティス女史が独身婦人宣教師として来日することになるのは、先に触れたとおりである。しかし、リディア夫人のその後のことは、これも先に触れたとおり、およそ未詳である。既述、

『天上の友』には「夫君の死に先だつ事四年、一九二九年八月二十八日、ニウヨーク州エルミラで永眠した。」とあるが、これは事実ではない。夫君カーティス師の長逝は一九一三年四月一日のことで、この時夫人が四人の子供と共に遺されたことは、より即時的な記事の伝えるところである。夫人の余生についての考証はなお今後に俟ちたい。

註

① 米国伝道会の宣教師たちは派遣された現場からボストンの本部に宛てて報告書簡を認めるよう求められていた。報告の時期や頻度はまちまちであるが、世界各地から集まってきた公私の報告や便りは全て本部において整理番号を与えられて保存された。我々はこれを宣教師文書と総称し、マイクロフィルムによつて閲読している。

② Rev. Horace Hall Leavitt (1846-1920). 一八七三年に米日し、大阪伝道区において伝道活動に従事。教会自給主義の推進者として知られる。引退帰米一八八一年。夫人 (Mrs. Mary Kelley Leavitt, 1853-1914.) の来日は一八七六年のことであった。

③ Joseph Hardy Neesima (1843-1890). 一八七四年に米国伝道会の任命を受けて帰国し一八七五年より京都に在って活躍。一八七六年一月に山本八重女と結婚した。

④ 米国伝道会は全米に三つの婦人伝道会の支援協力を受けていた。ボストンに本部をおき合衆国の東部を受け持つ婦人伝道会 (Woman's Board of Missions. - W. B. M.) シカゴに本部をおき中西部を受け持つ中部婦人伝道会 (Woman's Board of Missions of the Interior. - W. B. M. I.) サンフランシスコに本部をおき西部を受け持つ太平洋岸婦人伝道会 (Woman's Board of Missions of the Pacific. - W. B. M. P.) である。この三者の連携は W B M が主力となつて出版する月刊機関紙 *Life & Light for Woman* (以下 *L & L* と略す。) によつてかためられた。

⑤ Rev. James Horace Pettee (1851-1920) の夫人 Mrs. Isabella Wilson Pettee. 夫妻は一八七八年に米日し、主として岡山伝道区に在つて伝道に従事。一九一八年に帰米。本稿に言及したベティ夫人の動静に関しては、E・タルカット女史の報告書簡一八八〇年七月五日附参照。

⑥ 『讚美歌并樂譜』「美國派遣宣教使事務局、明治十五年三月大阪上梓。この本は一九九一年十二月に覆刻され、解説つきで新教出版社より刊行された。

⑦ Rev. William Willis Curtis (1845-1913). 初回来日は一八七七年。新妻デリア夫人と共に大阪伝道区で伝道活動に励んだが、

一八八〇年夫人と死別。一八八二年に先述の讃美歌集を刊行したのち体調を崩し静養のため帰米した。二回目の来日は一八八六年で、療養中に縁の生じたリディア夫人と生後七か月の長女と共に仙台伝道区に入り、東華学校のために盡瘁。学校閉校ののちは北海道に伝道区を開設すべく精魂を傾けて活動した。しかし夫人の健康状態悪化のため一八九六年に帰米。その後も日本伝道の志やみ難く執拗に再起を計るが果たさず、在米伝道団体の事業に献身するうち、その旅の車中に心臓発作によって帰天した。

⑧ 米国伝道会日本派遣宣教師G・オルチン師 (Rev. George Allchin, 1852-1935) によって神戸女学院に寄贈された、明治初期からの讃美歌集のコレクション。そのかなりのものが一九七九年に覆刻されている。

⑨ Mrs. Delia Eliza Harris Curtis (1850-1880), W・W・カーティス師夫人。本稿後段「デリア夫人のこと」及び「デリア E・カーティス夫人の手紙」参照。

⑩ リディア V・コーン・カーティス夫人 (Mrs. Lydia V. Cone Curtis, 1833-1929)。本稿後段「リディア夫人のこと」及び「リディア C・カーティス夫人の手紙」参照。

⑪ カーティス師はリディア夫人との間に二女二男を恵まれた。即ち、

Edith (一八八六年三月四日アラバマ州マリオンに出生)、
Otis Freeman (一八八八年二月十二日仙台に出生)、

Ruth Marilla (一八九〇年一月二十六日大阪に出生)、
Harvard Cone (一八九三年十月九日仙台に出生) である。

この子供たちがカーティス師にとってどれほどの誇りであり、また励みとなったかは、師の報告書簡の随所に読み取れる。

⑫ 「ウィリアム・ウィリス・カーティス師の生涯」及び「明治初期讃美歌に関する史料蒐集」―『覆刻「讃美歌并楽譜」解説』、一九九一年、神戸女学院、二九一六七頁。

⑬ Miss Virginia Alzade Clarkson (1850-1940)。一八七七年、カーティス師夫妻と同じ船で来日。神戸伝道区の「女学校」(のちの神戸英和女学校、現在の神戸女学院)の第二代校長の任を負うことになるが、一八八二年過労に倒れて帰米。一八八五年に再来日して京都に赴任し、同志社女学校に教鞭をとるうち、同じ伝道区のC・M・ケディ師 (Rev. Chauncy Marvin Cady, 1834-1925)と結婚。一八九二年に引退帰米した。

神戸時代の女史の報告書簡は『学院史料』第一号より第六号に訳出註記されて掲載されている。

⑭ 一八七九年二月十日附。本誌四七頁以下参照。

⑮ 『天上の友』一九七頁には夫人の誕生日は十月四日と記されているが、本稿では、米国伝道会の月刊誌 *Missionary Herald of the A.B.C.F.M.* (以下MHと略す) に據って、十月二十四日とする。(MH 一八八一年一月号一頁—二頁)

⑯ 一八七八年三月四日／九日附。本誌四二頁以下参照。

⑰ W・W・カーティス書簡一八八〇年十月二十九日附。

⑱ 前掲の書簡においてカーティス師は次のように述べている。「先生は彼女の計報に大層びっくりなさることでしょう。〔中略〕彼女は非常に丈夫に、また美しく見えました。そして先生は「中略」、彼女なら四〇年は立派にやっつけけるとお思いでした。」
⑲ 米国伝道会の日本派遣宣教師でこの時まで神のみ許に帰ったのは、ほかにA・H・アダムズ博士(Dr. Arthur Herman Adams, 1847-1899)のみ。アダムズ博士夫妻は一八七四年にJ・H・デフォレスト師夫妻及び新島襄師と共に来日し、大阪伝道区に在籍して医療宣教師として活躍していたが、体調を崩して一時帰米した夫人を迎えに渡米した帰路、船中でチフスに罹り、一八七九年十一月二十三日、日本を目前にして長逝。遺体は神戸に運ばれて葬られた。

⑳ 『天上の友』第二篇一九七頁。この文中の信用しがたい所はリディア夫人の逝去に関する件りで、歿年が一九二九年というのは間違いないようであるが、夫人が夫君(一九一三年逝去に先立ったことになっているのはどうしたものか。

㉑ 一八九三年七月五日附。本誌五六頁以下参照。

㉒ 米国伝道会日本伝道団発行の機関誌 *Mission News of the A.B.C.F.M. in Japan*。(以下MNと略す) 創刊一八九二年。

㉓ Miss Edith Curtis, オペリン大学卒業後一九一二年一月に来日(MN同年一月号六三頁、LL同、六—七頁に紹介記事)し、暫時新潟伝道区で活動ののち、梅花女學校に教鞭をとった。

㉔ MN 一九一二年三月号一〇五頁。

㉕ MH 一九一三年六月号二六二頁。

㉖ この学校は新島襄師の肝煎りで一八八六年に宮城英學校の名で開校し、翌年東華學校と改称した。一時はかなりの実をあげたが、国粋化の世相の下、一八九三年に閉校。

㉗ カーティス師夫妻の第二子 Otis Freeman.

㉘ Dr. Belz とある。

㉙ カーティス師夫妻の第三子 Ruth Marilla. この便りの一年ほど前、カーティス師が人員不足の大阪伝道区において救援活動を行なっていた時に生まれた。

⑳ この年一八九三年の日本伝道団年次総会は七月五日から神戸で開かれている。

㉑ カーティス師はこの直前の六月二十四日附で、行ってきたばかりの北海道の旅について報告を認め、MHの原稿として供している。これは、同誌同年九月号に掲載された。

㉒ Miss Mary Anna Holbrook (1854-1910). 米国伝道会独身婦人宣教師。医学博士。一八八一年から一八八七年まで中国で伝道活動に従事。日本在任中(一八八九—一九一〇)はこのように同僚宣教師たちの介護に盡くすことが少なくなかったが、また同時に、神戸女学院の理科の教員として学科内容の整備向上に貢献したことは銘記されなければならない。

㉓ 前出註㉒に掲げた記事。W・W・カーティス師の長逝に捧げられた一文で、筆者は、かつて東北伝道の活動を共にしたF・N・ホワイト師(Rev. Frank Newhall White, 1858-1926)である。師は一八九三年に引退帰米し、一九一一年当時シカゴに在った。

参考文献

米国伝道会宣教師文書

Manuscripts: Letters of Rev. W. W. Curtis.

Letters of Mrs. D. E. H. Curtis.

Letters of Mrs. L. C. Curtis.

Letters of Miss V. A. Clarkson.

その他若干の個人報告書簡、伝道区報告、議事録、回状、等。

Annual Report of the A. B. C. F. M.

Mission News of the A. B. C. F. M. in Japan.

Japan Weekly Mail.

神戸雑報社『七一雑報』

日本組合基督教會教師會編『天上之友』(大正四年)、同・第二篇(昭和八年)

川口居留地研究会『川口居留地』1(一九八八年)、同・2(一九八九年)

若山晴子「ウィリアム ウィリス カーティス師の生涯」―「覆刻『讃美歌并樂譜』解説」(一九九一年、神戸女学院大学)

Letters of Miss E. Talcott.

Letters of Miss J. E. Dudley.

Letters of Miss M. J. Barrows.

Letters of Rev. J. H. DeForest.

Missionary Herald of the A. B. C. F. M.

W. B. M., Life and Light for Woman.